



# 紙の記憶 倉本聰

戦時中、紙は統制品だった。父は出版社をやっていたから、紙の取得にはかなりの苦労をしたらしい。その為もあってか我が家では紙の使用については殊更厳格で、無駄遣いするひとく叱られた。

戦後も益々紙不足は深刻で、便所で使うちり紙もなく、母が新聞紙をきちんと切り揃え、木箱の中へ積み重ねてくれるのを一枚一枚よく揉んで、やわらかくして落し紙として使った。

その頃僕の家は杉並区善福寺にあった古い日本家屋で、便器の正面に書見台のような棚があり、そこに一冊のハードカバーの本が置かれていた。「菜根譚」という処世哲学書ともいうべき漢文の本だったのだが、小学校から中学に入る頃の

年齢で毎日否応なくそれをめくっているうちに、どういいうわけか面白くなり、特に漢文の持つ韻律に惹かれてとんとんとそれを暗記するようになった。ところがある日奇妙なことに気がつく。奥付けの頁が干切られて無いたのである。仔細に調べると扉の頁もない。そのうちその異常は次第に増大し、明日読もうと思っていた頁がない。一三日前に読んだ頁がない。当時痔疾に苦しんでいた父が、新聞紙の硬さに辟易し、戦前出版された菜根譚の紙の軟らかさに着目して、それを落し紙として秘かに使い始めたのである。兄貴がそれをたちまち学習して真似た。二人の男が干切っては使うその速度はどんどんエスカレートし、僕の暗記するスピードを凌いで遂にハードカバーの表表紙と裏表紙のみ、中身の全くない物質と化した。事程左様に紙不足の時代だった。

だから中学で文学に目覚め、小説読いたもの、シナリオめいたものを書き始めた頃、最初は殆んどチラシの裏だった。そのうちザラ紙のノートに野を引き、原稿用紙まがいのものを作って、その枠目に一字一字文字を埋めこんで行く手法を開発したときは、突然自分が芥川龍之介か谷崎潤一郎になった気がして一人ひそかに心ときめいた。

倉本聰(くらもと・そう) 1935年東京都生まれ。東京大学文学部美学科卒業後、59年ニッポン放送入社。63年に退社後、脚本家として活躍。77年、富良野に移住し、84年から脚本家と俳優を養成する「富良野塾」を主宰する。また、06年2月には「富良野自然塾」を創設し、植林と環境教育を事業の二本柱とする。代表作に「前略おふく様」「あにき」「北の国からシリーズ」「昨日、悲別で」「優しい時間」など。最新刊は『富良野風話 失われた森殿』



高校に入って大学ノートという大判のノートに遭遇した時は興奮した。横罫のノートの一番上の線と一番下の線の上にて二十等分した印をつけ、そこを針でついで穴を開け、それを縦線で結んで私版原稿用紙を作った。

初めて本物の原稿用紙を使ったのは漸く大学に入ってからである。しかしいきなり本物を活すのは純なる青年には畏れ多すぎた。だからまず私版原稿用紙、大学ノートに下書きをし、それから初めて本物と対峙した。多少形は変化したがこの習慣は今も抜けない。

だからこれから書く事を学ぼうとする若者がいきなり原稿用紙に向かうのを見ると、何だか無性に腹が立つ。ましては枠目を作るという努力もせずに、枠目のないところをボンボン電気で言の葉を出現させる人の所業はどうも許せない。僕にとっては紙というものは、言葉をそこに安置させる為の神聖かつ崇高な大地なのである。

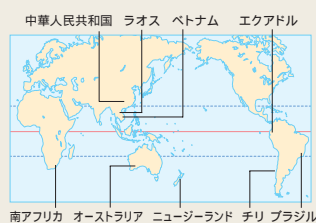
## PAPER Q & A Vol.2

### Q. 製紙メーカーは紙の原料を作っているって本当ですか?

A. はい。畑で野菜を育てるように、紙の原料となる木を植え、育てています。

私たち製紙会社は木を「育てる原料」と考え、森林資源を自らの手で作っています。植えているのは、約8年で成木になるユーカリやアカシアなど。こうして 植林 保育 収穫 再植林 という持続可能な森のサイクルが生まれ、安定して原料を確保することができます。植林地の多くは環境保全を考え、灌木地化した荒廃地や牧場跡地などを活用。また、若い木が生長をしている際にCO<sub>2</sub>をたくさん吸収するので、地球温暖化を防ぐ一助にもなっています。植林地は54万ha(国内15万ha、世界9カ国39万ha)になりました。

だが、2010年時点で60万haにすることを目標として、これからも努力を続けていきます。



資料：日本製紙連合会

今回は7月6日号、島本理生さんです。

photo: Shiro Miyake